

TPDS NEWS



※ TPDS = Tokyo Plastic Dental Society = (一社) 東京形成歯科研究会

Vol.106

配信日：2026年6月15日

配信元：(一社) 東京形成歯科研究会 事務局

季刊誌「温故知新」 記事紹介

“ 世にも不思議な人とのつながり ”

相談役・理事 北村 豊 先生

当会の相談役・理事 北村豊先生からご提供いただいた記事をご紹介します。

記事の内容につきましては、別紙※の通りでございます。

※ 別紙 出展元： 季刊誌「温故知新」2号 特集「つながり」2025年11月発行

事務局より

会員の先生方から情報提供いただければ、その都度、施設長に相談して、「TPDS NEWS」にて配信させていただいております(施設長より)。従来は、歯科・医科に関する内容を配信しておりましたが、北村先生のご指導もあり、「TPDS NEWS」を会員・関係各位の交流の場(ツール)として活用していただくことを目的に、配信する内容(企画)の幅を拡大することと致しました。お気軽に「TPDS NEWS」の材料(ネタ)を事務局まで(下記)ご提供いただけると幸いです。ご検討の程、何卒宜しく願い申し上げます。※反社会的内容等の場合は、配信を断念する場合がございます。予めご了承願います。

〒114-0002 東京都北区王子 2-26-2 ウェルネスオクデラビルズ 3F

一般社団法人東京形成歯科研究会 事務局

Email: info@tpdimplant.com

TEL:03-3919-5111/FAX:03-3919-5114

世にも不思議な人とのつながり

…人生は小説よりも奇なり！

北村 豊

「つながり」というテーマを聞いて、正直私は、内心「あつ、これならまかせておいて！」という気持ちと共に読者の方々に知っていただきたいという強い思いに駆られた。私には、「このような出会いは一生の間でも滅多に経験しないであろう！」というような非科学的で、自己中心的な判断ではあるが「極めて珍しい出会い」を何回も経験して来ているからであった。

長く生きていれば、珍しい「つながり」に遭遇する機会も当然多くなるだろうと思われ、人も多く思うので、最初に私の年齢を暴露しておくべきだ。私は昭和23年12月生まれの77歳の老若者で、まだ背中には背むすに至らない、現役バリバリの自称万年青年である。その証左に3人の息子、娘からは「お父さん、子供みたい！」と昔からよく褒められ、てはいるのだが……

【第一話・機内】

第一話は、私がアメリカの学会発表後に搭乗していたJALの国際線の中でのことである。いつものようにエコノミー席を利用

東京の推計人口の1426万分の1に出会い、「世間は広いようで狭い」ことを痛感し、ちなみにサマージャンボ宝くじ等の当選確率は1000万分の1だそうであるが、私は宝くじに一度も当選したことがない。なぜなら買ったことがないので……

【第三話・鼻笛】

さて第三話であるが、娘がワーキングホリデーでバンクーバーに滞在していた頃の話しである。店内と二人で街歩きしていたところ、楽器店の前に差し掛かった時に、ふと店内に入り込んでしまった。私は人生で楽器とは縁遠い生活を送っていたが、青年海外協隊でマレーシア先住民の歯科医療で3年間をジャングルで生活をしたことで、一本の竹から出来たリードもないシンプルな鼻笛を老婆が物悲しくもとても哀愁を帯びた音色で吹いてくれたことが心に刻まれていた。

「法螺貝がなくてもホラを吹ける人は各国でも沢山見てきたが、この簡素で常識を覆す、この鼻笛に出会ったことがきっかけで、何かシンプルで面白い楽器がないか？」という好奇心が入店をきっかけであった。私の興味を引く楽器は見つからなかったが、店主は元プロレスラーで、私得意とする空手で大ふざけをして楽しんだ後、奥様が日本人だというこの店主も大好物の「はかうけ」の菓

していた私であったが、時差の関係もあり、機内は暗くなり、客室乗務員（CA）の方々は少しの休息をとっておられたようである。強い喉の渴きを感じた私は、少し後ろめたさを感じながらコールボタンを2回程押したが、エコノミー担当乗務員は来られず、前方のカーテンを開けてビジネスのベテランのCAの女性が来て下さった。私「関西のご出身ですか？」CA「はい、そうです」、それからさらに続いた会話は、日本で初めて英語科ができた奈良市の私が卒業した高校のあらうことにも後



子と名刺を渡して店を後にした。そして戻った頃である。帰国して一ヶ月弱経った頃であらうか、この楽器店店主の奥様から驚きの内容のメールが届いた。この女性は小さい頃、全国優勝経験もあって強豪で知られる人口1万2000人の長野県で一番小さな町「小布施町のスポーツ少年団」に所属して、猛練習に励んでいたというではないか！小布施とバンクーバーは7800kmも離れた2地点であったにもかかわらず、彼女からのメールを読んだ瞬間に大きな喜びに満ちた「核融合」が生じて、速く離れた2地点が重なったような気がしたものであった。これを単に奇遇というありきたりの日本語で表現して良いものだろうか……縁とは何と不思議な繋がりなんだろう！「鼻笛のような不思議な楽器なんて、まずないだろう」と内心では思いながらも「入店してしまっただけから始まる私の不可解な行動を引き寄せてくれた世にも不思議なノンフィクション物語であった。

【最終話・間違電話】

さて、今回は紙幅の都合上、最終話について述べたい。私が青年海外協力隊員（1977～1980）としてボランティアをしていた半島マレーシアの先住民病院では、元カンボジア難民のザカリア内科医師も勤務していた。

輩であったのである。この方は私の予測が外れて、英語科卒ではなかったが、彼女は英会話クラブに所属し、なんと私の2年間担任だった英語の先生からも教えを受けていたそうである。

私の一言の声かけから始まった会話は、とても親近感の湧く距離感へと誘導してくれ、私の気持ちに余裕を持たせられるように気配りされたそのベテランのCAの対応には感動すら覚え、その初対面の後輩の存在をとても誇らしく感じたことは今も深く記憶に刻まれている。

その女性とのたった一回の出会い以降、搭乗中のCAの方々のさりげない行動や、言葉かけなどが私にとって学習の場となっていて、そこで学びが、今の私の診療においても役に立っていることは間違いない。また、自分を良き方向に導いてくれる学習の場は日々の生活の中にもさりげなく存在していることにも気づいた。

私が帰国して20年以上は経った頃であったらうか、再度のノンフィクションライターが、水木君のさんからの私の依頼で、ジャングルの先住民の村への案内、通訳のボランティアで渡航していた期間中のことであつたと思う。友人のカンボジア医師は、その時は私と共に元働いていた先住民病院を辞して、東海岸の病院で働いていると元同僚の別の医師から聞き、彼の自宅の電話番号をメモ書きしてもらった。



「本当に久しぶりで友人と会話できる」と喜び勇んで電話をしたところ、電話に出た女性のつれない態度の応答にびくりすると共に落胆してしまつた。正しくダイヤルしたにもかかわらず、繋がった相手は「間違電話の家だつたのだ。」

しかし、その女性の「違うよ！」という返事のと「キタムラ？ ドクターキタムラ？」と声量が急上昇しながらとても大きな驚きの叫び声が響いた！何と、間違電話の受け手は、私が協力隊でマレーシアに着いて直ぐにマレー語を1ヶ月間住み込みで習ったマレー系マレー人の家庭の当時小学生くらいだった娘さんであったのである。その時は奇跡の電話での再会に二人とも大喜びをした。この当時、私は独身ではあつたが

北村 豊 (きたむら ゆたか)



1948年奈良県生まれ。昆虫の研究では有名な東京農工大学の昆虫学研究室で2年近く学ぶ。神奈川歯科大学卒業。青年海外協力隊員として、3年間マレーシアで先住民の歯科治療に従事。今までに国際医療協力でマレーシア、バングラディッシュ、カンボジアなど滞在した国多数。現在、松本歯科大学病院臨床教授（口腔外科）、長野県小布施町「信州口腔外科インプラントセンター」所長。

【第二話・通行人】

第二話は東京大学医学部鉄門記念講堂で講演してからの帰路のことである。

早く居住している長野に帰りたい気持ちもあつたのか、慣れない道で上野駅まで迷わないよう、一人の通行人の女性に道を尋ねたところ、幸いにもJR上野駅方面に向かう人であつた。私が長野まで帰ることを話すと、この方も最近まで何と私の居住する長野県一小さな町であり、栗と北斎などが有名な小布施町と千曲川を隔てた対岸に住んでおられたことに驚いたが、しかも私の診療所の元患者さんだったのには奇遇である。

「赤い糸」では結ばれず、この時は赤褐色の色をした「奇跡の銅線」が導線の役割をこなしてくれたのである。この時の奇跡の出会いを創造してくれた元難民でポトピーブルであったザカリア医師は何年も経過して、政情も安定して来た祖国に一時帰国した時に、多くの夢や喜びを目前にして殺害されてしまったこと、この第四話は終る。何と悲しすぎる結末であらう！

出会いや別れはいつやってくるかは誰にも分からない。しかし、霞を食べて生きている仙人でないかぎり、生前の両親の出会いに始まり、出生後の人生では一生出会い、つながり、そして別れの連続である。今回の決断、アクティブな行動の結果、予想もしない人との出会い、つながりが生まれたものであつた。どうせ生きるならアクティブに人とのつながりをお互いに楽しみながらこの世から別世界でのつながりに胸を躍らせながら私は旅立ちたいと願っている。

